

〈翻訳〉

## 自発的祭壇、記念化、公共のリチュアレスク<sup>1)</sup>

ジャック・サンティノ

訳 佐藤 渉

私はこの論文で、民衆による記念化行為が一般的に追悼・記念から社会行動におよぶ概念領域に位置していることを論じる。つまり程度の差こそあれ、記念化の型とそれが生み出された状況に応じて、公共の記憶にかかわる行為や公共の記憶を伝えるものは周知の人物や出来事を指し示すとともに、死をもたらした状況についてある態度—社会的立場—を提起しているのだ。この連続体は、パレードやデモのような行為遂行的な公的行動にはっきりとあらわれる。こうした行動が特定の社会的課題を強調しているのは明らかである。さらに、彫像のような永続性と不変性を感じさせる文化的オブジェクトも、こうした連続体を明示している。この論文は、私自身が「自発的祭壇 (spontaneous shrine)」と名づけた現象を扱うが、それぞれの祭壇に固有の力学をよりはっきりと見極めるため、祭壇を一連の出来事や素材の中に位置づけてみたいと思う。

私を用いる「自発的祭壇」という言葉は、思いがけない死がもたらされた現場を標すために人びとが自らの衝動にしたがって設置する、一時的な記念物を指している。通常、このような追悼・記念を目的とした集合体 (Santino 1986) は、宗教的な聖像に加え、花やろうそく、個人的な形見の品、メッセージなどから成る。そのうちのどれか、あるいは全部が供えられるかもしれないし、状況が異なれば別の要素が求められるだろう。たとえば交通事故による死なら、十字架や花輪や花によって事故の現場を標するのが普通である。準軍事組織による大規模な攻撃によって死者が出た場合、亡くなった人や民

衆に向けたメッセージがしばしばささげられる。アメリカではギャングに関連した殺人の場合、ギャングの構成員にとって有意な要素を含む壁画や祭壇によって標される (Sciorra and Cooper 1994参照)。人びとはこうした場を利用して、誰かが亡くなったときや、それ以降の大事な日に非公式の追悼式や記念を目的とした儀礼を執り行う。自発的祭壇を構成する物品や像は国によってさまざまである。たとえばスペインでは、ETAによる攻撃に対する反応として、黒いリボンや白い腕のイメージが用いられた。北アイルランドではサッカーの襟巻、日本では仏教のシンボルが用いられる (Santino 2006の Sanchez Carretero 論文参照。自発的祭壇のさまざまな型については Thomas 2006が論じている)。

「自発的祭壇 (spontaneous shrine)」という用語はある程度受容されるようになったが (たとえば Grider 2001参照)、いささか議論のある用語でもある。私は “spontaneous” という語によって個人の死を、その死の文脈において重要な場所で追悼する行為が衝動的である (実際にそうかもしれない) とか軽薄だ (決してありえない) などとほのめかすつもりはない。むしろ関係当事者の自主性を示すためにこの用語を用いるのだ。つまり、自らの強い願いによって、あるいは友人や家族が同じことをしているのを見てそうした場を作ろうとか自分も貢献しようと決断した思いを指しているのである。こうした祭壇は国家や教会による公式の指示によって作られるのではない。実際のところ、国や教会の代表はしばしばこうした祭壇に眉をひそめるのである。

私が先に述べたような「集合体」を祭壇と名付けたのは、それらが単なる記念碑以上のものだからだ。死の現場は故人が生きていた最後の場所なのだから、そこに形見の品を供えるのは大切なことなのだ、と私は関係者から何度も聞かされた。このように少なくともある意味では、死の現場と祭壇は死よりも生を意味している。そこにささげられたメッセージは死者、つまりあの世にいる人びととの対話である。それだけではなく、Steven Zeitlin が示

したように、メッセージはしばしば故人の視点から書かれている（2006。9.11に関連したメッセージの詳しい検証はFrankel 2001参照）。したがって自発的祭壇は、双方向コミュニケーションが生じ得る、あの世への入り口とみなすことができる。この理由だけでも、そうした集合体を祭壇とみなすことが可能だろう。おまけに、祭壇はしばしば旅の目的地となる。旅を行う人たちは、自分たちの旅を決まって「巡礼」と呼ぶ（Dubisch 2005）。それに祭壇は、当然ながら死者を称える。自発的祭壇は単なる追悼・記念以上のものであり、世俗的あるいは（宗教的・精神的であるとしても）大衆的な性質を持つ、一種の民俗祭壇なのだ。

人が亡くなったことを示す道路脇の十字架は、北米では植民地時代から知られている（Griffith 1992）。一般に路傍に十字架をたてる風習は、スペイン人によって新世界にもたらされたと考えられており、アメリカ南西部とメキシコの地域的な民俗伝統となっている。アメリカ先住民のあいだにも見られる。ここ数十年でこの風習はアメリカ全土に広まった。ヨーロッパではこの風習の先例が数多く存在する。とりわけギリシャやアイルランドで類似した例が見られる。

20世紀後半になり、交通事故以外の原因による死を認知する習慣が、死者を悼む儀礼として新たに登場した。おそらく最初の例は誰ひとり死んでいない場所で生じた。それはワシントンD.C.のベトナム戦争戦没者慰霊碑である。この慰霊碑のデザインは型破りで建設中にも物議をかもした。ところが完成してみると、墓石のような単純さに加え、犠牲者の名が階級順ではなく年代順にひとつひとつ刻まれていることによって非常に感動的であることがわかった。後に明らかになったように、この慰霊碑は人びとの参加を促した。そこには今日にいたるまで愛と追憶の徴がささげられている。

この追悼行動は自然に生じた。こうした自発的行動は、必ずしもすでに記念化された死の現場で行われる必要はなく、ほどよい複製で間にあう。たとえばダイアナ妃が亡くなったパリの現場は追悼の場となっている一方、何百

万もの人びとが彼女に縁のある英国王室領に花をささげている。

アメリカや世界で、それとわかる行為として最初に自発的祭壇が登場したのがいつなのか、確信をもって特定するのは難しい。最初の例としてジョン・レノンの死を挙げる人がいる。しかし私は、当時すでにそうした現象が存在していたように記憶している。スコットランドのロカビー上空でテロリストが航空機を爆破した事件のように、重大な悲劇は民衆の悲しみを表現する手段としての自発的祭壇を世間に広め、一般化した。ダイアナ妃の死に伴うイギリスの「花の革命」とともに、アメリカにおける2001年9月11日、スペインにおける2003年3月11日のような世界規模の悲劇は、あらゆる種類のメディアによって広く報道されてきた (Kear and Steinberg 1999; Walter 1999 参照)。Benedict Anderson は、初期アメリカで印刷媒体が独立記念日の慣習の伝播に果たした役割に注目したが (Anderson 1991)、現在ではテレビとインターネットという電子媒体が、世界中の視聴者に祭壇をつくる活動を紹介している。

自発的祭壇の重要な側面は、公共空間に姿をあらわし、世間の注目を集めることである。たとえば祭壇にささげられたメッセージは死者に向けられているかもしれないが、公衆の面前に並べられ、しばしば多くの人に読まれることを想定している。少なくとも書き手は、広範な見物人がメッセージを目にすることを了解している。祭壇が目を向けさせる死は、公共の言説の一部となっている、ある状況によって引き起こされたものである。飲酒運転であれ、ティーンエイジャーの自殺であれ、警察の残虐行為であれ、準軍事組織の市民に対する暴力であれ、自発的祭壇が公共風景あるいはカルチャースケープの一部となっている理由のひとつは、公共にかかわる困難な問題を文字通り指し示しているからである。我々がこうした問題を取り上げるとき、死は名指しされた領域の一部となっている。自発的祭壇は個人の死を記念化するだけではなく、死の原因と、対処すべき社会悪に注意を促す。そこに存在する暗黙のロジックはおそらく次のようなものである。問題が適切に対処さ

れていれば死は起こらなかつた、あるいは、私たち民衆がこうした問題に意識的にならない限り、同じような死がさらに繰り返されるだろう。

ここまで私は、自発的祭壇が思いがけない死や一定の重要な社会問題に対する非公式の反応を示していると論じてきた。その過程で、公式／非公式の儀礼・記念化という二元的な枠組みを示した。私はこれらの事例において、これが有用で不可欠なパラメーターだと考えているが、これまで述べてきたような死に対して、多様な儀礼的反応があることも知っておかねばならない。ある個人の死に際して、家族や同僚（学校の友人や仕事仲間）、教会、あるいは同胞市民によって複数の追悼行事が行われるかもしれない。公式な行事もあれば、それほど公式ではない行事もあるだろう。統治政府の文化に関わる兵士、警官、消防士といった人たちの死は、これみよがしの国家儀礼によって追悼されるだろう。死は英雄的な犠牲として語られ、統治体制の基盤となっている諸前提をさらに推し進めることになる。つまり、彼らの死は公的言説の内部に置かれるのだ。ギャングの追悼壁は、大いに異なる（しかし直接関連した）言説内に位置し、大いに異なるコミュニティから生まれ、大いに異なるコミュニティに語りかける。追悼壁は別の美学にしたがって語る。以上から第一にいえることは、それぞれの追悼・記念行事において、故人のアイデンティティは関係集団のニーズと性格にしたがって構築されるということである。付随していえるのは、これらのアイデンティティ＝構築物は、必ずしも互いに調和または一致するとは限らないということだ。家族は愛する者が死んだ道路の脇に手作りの十字架を立てたいと願うかもしれない。しかし役人はそれを認めないかもしれない。役人は自家製の記念物を、許容範囲と思われる代替標識と取り換えることもある。ほとんどの場合、故人と関わりのあった人たちは、そんな妥協は受け入れられないと考える。ここには公共空間をめぐる対立が見られる。誰がその空間にアクセスすることができ、その空間を定義し、統制するのかをめぐって（Everett 2002）。

北アイルランドでは、準軍事組織のメンバーを追悼する壁画が制作されて

いる。死者は軍服姿で描かれ、殉教した兵士として表現される。一方で自発的祭壇にささげられる手紙やメッセージには、まったく異なる言説が用いられる。死者は家族関係にしたがって「お父さん」、「おじいちゃん」、「ピーター」などと呼びかけられる。祭壇を作った人たちは（準）軍事組織の用いるレトリックを拒絶し、かわりに同じ準軍事組織が破壊した、個人や家族の関係を示すことにこだわる（Santino 2000）。自発的祭壇は、アメリカでいまだに大きな問題であるベトナム戦争、北アイルランド等の準軍事組織、飲酒運転、都市のサブカルチャーなど、大きな社会問題に顔と名前を与え、人と人とのつながりを明らかにする。

自発的祭壇はまさにその本質によって、空間に対する支配権の主張と言説の統制にしばしば挑戦する。聖職者は、聖別されていない儀礼だとして祭壇の存在とそこで行われる行事に対して異議を唱えてきたことが知られている。なぜなら、自発的祭壇は教会の公式なヒエラルキーによる統制の外側に存在するからである（Westgaard 2006）。企業は商売を失うのを恐れて所有地内や近辺に祭壇が作られることを嫌うし、市の職員は祭壇の合法性について絶えず議論している。

### さまざまな記念活動—デリーの場合

「我々の芸術は記念するための芸術だ。何らかの進歩のために代償を払った、ありふれた人びとを称えようとしているのだ。」

— Kevin Hasson, in *Art and Healing: The Bogside Artists*, by Will Kelly (n.d.; published by the Bogside Artists and Derry City Council)

北アイルランドで二番目に大きい都市は、正式にはロンドンデリーとデリー—という二つの名を持っている。にもかかわらず、北アイルランドとアイルランド共和国のカトリック系市民や民族主義的な市民は、デリーという呼び

名しか使わない。今日では権力分有の成功物語とされているが（人口の大半はカトリックだが市議会は統合されている）、この街は苦難に満ちた過去を抱えている。街の名はアイルランド語の“Doire”に由来し、英語風に変化して“Derry”となった。ところが17世紀、植民地「開拓者」（ここではロンドン・カンパニー）によって不当に占有されると“Londonderry”と変更された。名前をめぐる対立に呼応して、この街には複数の記念行事が存在する。

記念化行為はデリーにとって目新しいものではない。プロテスタント系住民と統一党員は、デリーの包囲が解かれた記念として、年に2回パレードを行う。1688年から1690年にかけてオレンジ公ウィリアムの軍勢がジェームズ軍を破った戦いの記念である。毎年12月にはデリーの長官だったロバート・ランディの肖像画が焼かれる。ランディはウィリアムの軍勢が到着する前に、ジェームズ軍と和解した人物である。ランディの肖像画を焼く行事と年に2回のパレードはなかなかの見もので、街はたくさんの観客（多くは市外から来た人たち）であふれかえる。通りには音楽が満ち、かがり火が焚かれる。参加者たちは、アイルランドの地でプロテスタントのためのプロテスタント国家を存続させていく上で決定的に重要だったとみなされている出来事を祝うのだ。ボグサイドとして知られるローマ・カトリック系住民の居住地は、旧市街を囲む壁の外の傾斜地に広がっている。この地区では「ボグサイドの戦い」や「血の日曜日」といったより新しい事件が壁画や記念碑、それに毎年行われるデモによって記念されている。

1969年8月12日、Apprentice Boys（オレンジ党に似た友愛組織。ランディが敵軍と面会するのを防いだ徒弟たちにちなむ）が行進していると、ボグサイドの住民が抵抗を開始した。パレードが侵略的で勝ち誇っているように見えたのだ。石や瓶が投げつけられ、現場は瞬く間に全面的な暴動と化した。自家製火炎瓶には王立アルスター警察隊の武力が対抗した。住民はいわゆる「立ち入り禁止（“no-go”）」区域を設けた。誰かが切妻壁に絵を描き、「こ

こから自由デリー」という言葉を書きそえた。アルスター警察隊は戦車を動員し、バリエードをなぎ倒した。この衝突は36時間続き、「ボグサイドの戦い」と呼ばれている。それから数年後の1971年、カトリック系住民の市民権を要求する平和なデモが、武装したイギリス軍の銃撃によって粉砕された。この事件で14名が殺害され、さらに一人が後に病院で亡くなった。この出来事は「血の日曜日」として広く知られるようになった。こうした出来事は、あらゆるバックグラウンドのアイランド人の公共的想像力に焼きついている。また英国議会のメンバーによる最初の調査で、兵士たちの責任がまったく問われなかったことが、さらに事態を悪化させた。

今日、これらの出来事は視覚に訴えるいくつかの方法で記憶されている。デモが行われた地区は再建され、(ベルファストなど北アイランドの他地域とは異なる) 写真を思わせる写実的スタイルの壁画に囲まれている。壁画には、事件当日の有名な場面が描かれている。第二次大戦時のガスマスクをかぶり、ベッド・スプリングで身を守る少年。休戦の旗代わりにハンカチを振って、怪我人を安全な場所へ必死に運ぼうとするデイリー神父。殺された人びとの顔。路上に設置された、芝で覆われた広い安全地帯には「ここから自由デリー」と記された切妻壁のオリジナルを始め、死者を追悼するための重要なモニュメントが並んでいる。壁画の隣には、悪名高いメイズ監獄のH型棟を模した花崗岩が並んでいる。メイズ監獄には共和国軍の囚人が収容された。安全地帯の反対側の端には、血の日曜日が原因で命を落とした15人の名前を刻んだ碑が建っている。私がおその場を訪れたとき、一度は聖母マリアのプラスチック像が置かれており、別の機会には花がささげられていた。この記念碑は墓石ではない—誰もそこには埋葬されていないのだから。ワシントン D.C. のベトナム戦争戦没者慰霊碑と同様に、この公共的記念碑は未完成だとみなされ、市民からある反応を引きだした。すなわち追悼を個人化し、いつまでもやむことなく死者を敬う必要性を感じさせたのである。

多少なりとも永続的な性格を持つ壁画や記念碑に加え、「血の日曜日」の

死者は別の形でも追悼されている。毎年、人びとは故人の顔が描かれた旗を掲げて通りを歩く。明らかに社会的な憤りに訴えるこの種の象徴的で劇的な行事を、私は「リチュアレスク (ritualesque)」と呼んでいる。

「血の日曜日」を記念するデモは毎年おこなわれ、身内を殺された家族が故人の大きな肖像画を抱えて歩く (Dunn 2000参照)。この催しはその事件で殺された15人を追悼・記念すると同時に、イギリス支配下でローマ・カトリック教徒が受けた不当な扱い全般、とりわけイギリス当局による隠ぺいに対する民衆の抗議でもある。Herriet Senie (2006) が「抗議による追悼」と呼ぶ、激しい憤りと追悼という二重性ゆえに、こうした追悼・記念のあり方はリチュアレスクな公的行事の最たる例といえる。リチュアレスクは、よく知られたミハイル・バフチンの造語「カーニバレスク (carnavalesque)」 ([1968] 1984) を補完する。自発的祭壇やそれ以外の死の記念化の研究において (2006)、私はこうした現象が死者 (ふつうは思いがけず亡くなった人) を追悼すると同時に、死の状況 (飲酒運転、警察の残虐行為、準軍事組織による暴力など) に注意を向けさせることを指摘した。自発的祭壇は観衆にある態度を取るように迫る。すなわち、こうした状況を非難するのか、あるいは変えようとするのか。したがって、こうした現象は本来的に政治的である。それらは行為遂行的でもある。J. L. Austin は「私は厳粛に誓う」、「ここに二人を夫婦と宣言する」など、口にすることによって社会状況を変える発話を行為遂行的であるとしたが、それと同じ意味において行為遂行的なのだ。自発的祭壇に加え、イラク戦争で死んだ兵士の名前を国会議事堂の階段で読み上げる、エイズキルトを作成・展示するといった死の公的記念化の多くが、死を記念すると同時に社会のある側面を変える試みとなっている。このような変化をもたらそうとする意図が「リチュアレスク」である。こうした行事は何にもまして象徴的であるが、直接、変化や行動をもたらそうとすることから手段でもある。「リチュアレスク」は (純粹に表現的というより) 手段でありながら象徴機能を持つ大衆行動である。変化を生み、社会的態度やふ

るまいを変え、何かを起こすことを目的として行われるものなのだ。

大規模な祝祭行事の多くはこの性質を持つ。たとえばゲイ・プライド・デーやアース・デーは社会的態度に関わる行事であり、態度やふるまいを変えようという意図を持ち、その目的にあわせて設計されている。合衆国の「民族の日 (El Dia de la Raza)」も同じ性質を持つ。同様に、戦争、原発、銃規制などに関する政治的示威行動にはたくさんの人が集い、陽気なお祭りのように見えるが(実際にそうかもしれない)、多くはある特定の目的を達成するために行われるのである。「リチュアレスク」と「カーニバレスク」という二つの概念は、大衆行事の両極を表している。とはいえ、それらに対立するわけではない。たとえばプライド・デーの奇怪な行動は、カーニバレスクそのものである。しかしこの場合、カーニバレスクはリチュアレスク的に用いられている。つまり、肌を公共の場でさらす祝祭的な倒錯、すなわちカーニバレスクの発現は、見物人に自分の態度や思い込みの再考を迫るために行われるのだ。

個人の死はしばしば抵抗の一形式として公に記念される。デリーの例から、我々は多様な記念のあり方を見ることができる。300年前の勝利(北アイルランドが英国に統合された現状を公式に認可しているとみなされている)を祝って街の中心部で年2回開催される大規模なパレード、死者の肖像を掲げ、現体制と現体制に結びつけられた差別や暴力や宗派主義に抗議するリチュアレスクで行為遂行的なデモ、追憶のための個人的な儀礼行為。壁画や建造物が、激しい衝突と死者を出した武力行使の記憶を伝えて立ち、ある空間—コミュニティによる抵抗が価値を高めた空間—を創出している。これらのモニュメントは戦いの場や死者が出た場所に設置され、標識となっている。それらは、悪いことをしていない人びとが殺された地区を表象している。その結果、死者の名が刻まれた墓石のようなモニュメントは、民衆が自ら参加し、継続して儀礼活動を行う場となっている。人びとは花や聖像をささげる。こうした行為は自らの動機に基づき、自発的に行われる。Apprentice Boys の

パレードはデリーの外壁の上で行われるため、下に位置するボグサイドからは目につきやすい。英国の狙撃兵はかねてから計画を立て、壁の上から市民を狙撃し殺害したといわれている。空間、場、儀礼、記念化—ここではあらゆるものが折り重なっている。意味と社会が絶え間なく多義的に構築される過程で、それぞれの要素が依存し合い、互いを基礎として成立している。

あらゆるレベルにおいて、常に「記念」から「行為遂行性」(Austinのいう変化を引き起こそうとすること)にいたる連続体が存在する。公的な彫像はしばしば記念のみを目的としているように見えるが、その行為遂行的な機能は規範性を作りだすことにある。したがって彫像は不可視化するのである。将軍の彫像や、古い戦争を記念する建造物は不可視となる (James E. Young は、公式な記念物の建設は忘却の第一段階を示している、と述べている (1993))。それゆえベトナム戦争戦没者慰霊碑がとりわけ画期的なのだ。この慰霊碑は軍事に関する規範性の言説を打ち破り、一般社会およびコミュニティの構成員が参加し完成する余地を残し、それを要求しているのだから (Dubisch 1992参照)。公式の記念物は、事物はそうあるべきものとして存在しているのだと表明している。喪失と苦難という「大きな物語」の裂け目は常に存在してきたのだが、公式の記念物は裂け目を包み込み、それ自身の言葉で定義しようとする。すると社会構造は自然化される。しかし、ひとつひとつのモニュメントや儀礼行為、それにリチュアレスクな行事は、特定の集団に語りかけ、特定の集団のために語る (社会を自然化するモニュメントについては Handelman 1990参照; さまざまな人びとによる公的モニュメントの多様な利用のあり方については Ortiz 2006参照)。デリーに見られる多様な記念物は、行為主体の重要性を反映している。記念物に何かを供える行為は、個人あるいはコミュニティとして、物質文化をコミュニティの神聖な空間に組み込む行為である。花やプラスチックのマリア像をささげる行為は、コミュニティの精神思潮と信仰体系を反映しているのだろうが、それは同時に死者を悼み、死をもたらした状況を軽蔑し非難する個人による独自の行為

でもある。ここではデモ、切妻壁の壁画、神聖化された土地に立てられた銅像や彫刻、自発的祭壇など複数の記念化形式がしばしば同時に機能している。これらすべてが相互に関連し、力と意味を引き出し合っているのだ。

## 注

- 1) 本稿は「暴力からの人間存在の回復」研究会が主催し、2009年3月12日に立命館大学に於て開催されたジャック・サンティノ氏講演会の講演原稿を翻訳したものである。

## References Cited

- Anderson, Benedict (1991). *Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bakhtin, Mikhail ([1968] 1984). *Rabelais and His World*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- The Bogside Artists and Will Kelly (n.d.). *Art and Healing*. Derry, NI: The Bogside Artists and the Derry City Council.
- Dubisch, Jill (2005). "Healing 'the Wounds That Are Not Visible': A Vietnam Veterans Motorcycle Pilgrimage." In Dubisch, Jill and Michael Winkelman, eds., *Pilgrimage and Healing*. Tucson: University of Arizona Press.
- Dunn, Seamus (2000). "Bloody Sunday and its Commemoration Parades." In T.G. Fraser, ed., *The Irish Parading Tradition*. New York: St. Martin's Press.
- Everett, Holly (2002). *Roadside Crosses in Contemporary Memorial Culture*. Denton, TX: University of North Texas Press.
- Frankel, Beatrice (2001). *Les Ecrits de Septembre*. Paris: Textuel.
- Grider, Sylvia (2001). "Spontaneous Shrines: Preliminary Observations Regarding the Spontaneous Shrines Following the Terrorist Attacks of September 11, 2001." *New Directions of Folklore* 4.2. <http://www.temple.edu/isllc/newfolk/shrines.html>
- Griffith, James S. (1992). *Beliefs and Holy Places*. Tucson: University of Arizona Press.
- Handelman, Don (1990). *Models and Mirrors: Towards an Anthropology of Public Events*. New York: Cambridge University Press.
- Hass, Kristin Ann (1998). *Carried to the Wall: American Memory and the Vietnam Veterans Memorial*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Kear, Adrian and Deborah Lynn Steinberg, eds. (1999) *Mourning Diana: Nation, Culture and the Performance of Grief*. London: Routledge.

- Santino, Jack (1986). *The Folk Assemblage of Autumn: Tradition and Creativity in Halloween Folk Art*. In Vlach, John Michael and Simon J. Bronner, eds., *Folk Art and Art Worlds*. Ann Arbor, MI: UMI Research Press.
- Santino, Jack (2000). *Signs of War and Peace: Social Conflict and the Uses of Symbols in Public*. New York: Palgrave MacMillan.
- Santino, Jack, ed. (2006). *Spontaneous Shrines and the Public Memorialization of Death*. New York: Palgrave MacMillan.
- Sciorra, Joseph and Marthe Cooper (1994). *R.I.P.: Memorial Wall Art*. New York: Henry Holt and Company.
- Senie, Harriet (2006). *Mourning in Protest: Spontaneous Memorials and the Sacralization of Public Space.* In Jack Santino, ed., *Spontaneous Shrines and the Public Memorialization of Death*. New York: Palgrave MacMillan, 41-56.
- Thomas, Jeannie Banks (2006). "Communicative Commemoration and Graveyard Shrines: Princess Diana, Jim Morrison, My "Bro" Max, and Boogs the Cat." In Jack Santino, ed., *Spontaneous Shrines and the Public Memorialization of Death*. New York: Palgrave MacMillan, 17-40.
- Walter, Tony, d. (1999) *The Mourning for Diana*. Oxford: Berg.
- Westgaard, Hege (2006). " 'Like a Trace' : The Spontaneous Shrine as a Cultural Expression of Grief." In Jack Santino, ed., *Spontaneous Shrines and the Public Memorialization of Death*. New York: Palgrave MacMillan, 147-176.
- Young, James E. (1993). *The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Zeitlin, Steve (2006) "Oh Did You See the Ashes Come Thickly Falling Down? Poems Posted in the Wake of September 11." In Jack Santino, ed., *Spontaneous Shrines and the Public Memorialization of Death*. New York: Palgrave MacMillan, 99-118.

(ジャック・サンティノ、The Bowling Green State University 教授)

(訳：佐藤 渉、立命館大学法学部准教授)